

五代史故事における女たち：脈望館鈔本「哭存孝」 を中心に

福永，美佳
九州大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/16514>

出版情報：中国文学論集. 38, pp.62-76, 2009-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

五代史故事における女たち

—— 脈望館鈔本「哭存孝」を中心に ——

福 永 美 佳

一 五代史故事の成立

唐の滅亡から宋の建国までの約五十年の間、全国各地で熾烈な覇権争いが繰り広げられ、王朝が次々と興っては消えた。それら短命の王朝にちなみ、この時期を五代十国と呼ぶ。

後にこの戦いの様子は、三国志がそうであったように、魅力ある素材として昇華された。北宋の都汴京の様子を記録した『東京夢華録』巻五「京瓦伎芸」には「霍四究の説三分（三国志語り）」と並んで「尹常売の五代史（五代史語り）」が記されており、人気の高さがうかがえる。ただし、具体的にどのような話が語られていたかまでは、伝わっていない。

元に入っても歴史に取材したこれらの物語の知名度は相当高かったようである。芸人と秀才の恋愛を描いた石君宝作の戯曲「諸宮調風月紫雲亭」（元刊本）の第一折「混江龍」にも、

〔混江龍〕 我唱的是三國先饒十大曲、俺娘便五代史讀添八陽經。

〔混江龍〕 私という芸人が三国志に先に十大曲を加えれば、母は（あの騒々しい）五代史に八陽経を添える。という一節がある。歴史とは関わりのない作品の歌詞に読みこまれるほど、三国志や五代史というのは、元の人々にとって身近なものであった。

現在、残された最も古い五代史故事は宋末元初建安の刊とされる『新編五代史平話』（以下『五代史平話』と略

す⁽²⁾である。作者は不明である。もともと梁・唐・晋・漢・周の歴史をそれぞれ二巻ずつ収めた十巻本であったが、現在、梁史下と漢史下を欠く。

このほか『残唐五代史演義伝』(以下『残唐五代』と略す)がある⁽³⁾。作者は羅貫中だと言われているが、はっきりしない。版本は「鑄李卓吾批点」と題する明刊の八巻本、「玉茗堂批点」と称する六巻本、および坊刻本が伝わっている。本稿では李卓吾批評本を使用した。

戯曲もいくつか伝わる。関漢卿「鄧夫人苦痛哭存孝」(脈望館鈔本)、陳以仁「十八騎誤入長安」(越調「古竹馬」⁽⁴⁾)の二曲のみ、無名氏「飛虎谷存孝打虎」(脈望館鈔本)、無名氏「雁門関存孝打虎」(脈望館鈔本)、無名氏「壓觀樓掛午時牌」(脈望館鈔本)、無名氏「李存孝大戰葛從周」(現存せず)などがこれに当たる。

これらの五代史故事というのは同じ題材を扱っているけれど、成立した年代や表現の体裁が異なるというだけでなく、物語の長短、史実との距離の取り方、人物や心理の描写方法などに違いがみられ、それぞれ独自の物語世界を構築している。そのなかでも、今回注目したいのは元雜劇「鄧夫人苦痛哭存孝」(以下「哭存孝」と略す)である。作者は元雜劇を代表する劇作家関漢卿である。題名には存孝の名が付けられているものの、主役は彼ではなく、妻の鄧夫人である。物語はすべて女性の口から語られ、他の五代史故事とは一線を画す。したがって五代史故事全体を考える上で、女性の視点を採用した本劇がどのようにして作られたかを検討することが重要となる。激動の五代十国時代を生き抜く男性たちの影で、女性がどのように考え、行動しているのか。それがどのように戯曲化されているのかを考察してみたい⁽⁵⁾。

二 先行研究について

検討に入る前に、先行研究について述べる。従来の五代史故事の研究では『五代史平話』と『残唐五代』との比較がたびたび行われた。橋本堯氏⁽⁶⁾によると『五代史平話』というのは「王朝中心主義」の傾向にあり、史書をつなぎ合わせたようだという。その一方で『残唐五代』というのは「個人英雄中心主義」の傾向にあり、主要部分は英

雄豪傑の個人的な活躍、とくに中心的人物李存孝によつて構成されていると述べる。この見方を一歩進めたのが大塚秀高氏⁷⁾である。大塚氏は『残唐五代』における各巻の不均衡な構成について、後唐正統史観の立場から残唐について語つたためだと言ひ、後唐の滅亡以後は蛇足のようなものだと言ひ、つまり、五代史に取材しながら、この二つは全く性質の異なる小説といえる。なお、これについては中鉢雅量氏⁸⁾が「歴史記述に密着した『五代史平話』や『唐書史伝』のタイプ」と、「歴史の中では次要人物に過ぎない、ある個人を中心に歴史を語る『残唐五代』や『隋史遺文』のタイプ」という二つに明快に分類している。

また小説と戯曲との関係については、趙景深氏⁹⁾によつて『残唐五代』が元人の著作で、小説をもとに雜劇が改編されたと言ひられたが、その後この見方は否定された。とはいへ、両者に密接な関係があつたことは間違いないよう、小松謙氏によつて『残唐五代』第三十三回にみえる祭文と、元雜劇「哭存孝」第四折の李存孝をまつる祭文における文字との一致が指摘されている。本稿が対象とするのは、ここに名前の挙げられる「哭存孝」である。考察に入る前に梗概を記す。全体は四折構成で、次のような内容を備える。

正旦は鄧夫人に扮す。鄧夫人の夫安敬思は李克用の義理の息子となり、李存孝と名乗る。李存孝はこのたび黄巢の乱で手柄を立てたため、本来なら潞州の長官を任されるはずであつた。ところが、康君立¹⁰⁾と李存信に先を越され、邢州鎮守を命じられる。李克用に抗議するが、彼は酔つ払つて話にならない。鄧夫人は不満を抱くものの打つ手がなく、夫とともに邢州へと旅立つ。(頭折)

正旦は鄧夫人に扮す。康君立と李存信は、李存孝には本名の安敬思を名乗るように唆し、李克用には李存孝が裏切つて勝手に改名したと密告する。李克用の妻劉夫人はこの報告を不審に思い、邢州に足を運ぶ。鄧夫人は劉夫人に対し、すべて康君立と李存信とが仕向けたことだと訴える。劉夫人は李存孝のことは自分が請け負うといつて帰宅する。しかし、李存孝は車裂きの刑に処せられてしまふ。(第二折)

正旦は莽古歹に扮す。莽古歹は劉夫人に対し、李存孝の処刑の一部始終を語る。劉夫人は李存孝の死を嘆き悲しむ。(第三折)

正旦は鄧夫人に扮す。劉夫人は李克用に対して、康君立と李存信の悪巧みを告げる。劉夫人は、夫を亡くし

嘆き悲しむ鄧夫人のもとを訪れる。李克用は李存孝を祀り、康君立と李存信を糾弾するとともに彼らに対し車裂きの刑を言い渡す。鄧夫人は李存孝の敵を討つたことを喜ぶ。(第四折)

該劇では、正旦が二人の人物を演じ分ける。頭、二、四折では李存孝の妻である鄧夫人に扮し、第三折ではモンゴル人の莽古歹に扮する。そこで以下これらの人物に注目して、それぞれの役割と登場した意味について述べることにしたい。

三 鄧夫人による李存孝評價

鄧夫人がどのような人物であったのか。詳しいことはよく分からない。しかし、夫である李存孝が不遇な一生を遂げたということは、戯曲が成立する以前から強い衝撃を持って受け容れられていたよつである。『五代史平話』唐史、巻上には、次のように書かれている。

那存孝欲立大功、取重於克用、存信又讒譖於其間。存孝惧及禍、密地與王鎔・朱全忠交結。「中略」邢州城中食盡、李存孝出見李克用、泥首謝罪。克用將檻車囚繫以歸、用車裂於牙門。

李存孝は大きな手柄を立て、克用に重用されたいと思つたが、存信がその間に讒訴した。存孝は禍が及ぶことを恐れ、ひそかに王鎔や朱全忠に通じた。「中略」邢州の城中は食料が底をつき、存孝は克用のもとへ現れ、泥首して謝罪した。しかし、克用は(存孝を)護送車に捕えて帰り、役所で車裂きの刑に処した。

この記述の趣旨は『新五代史』巻三六、義児伝に記載されたものと一致する。それによると李存孝は手柄を立てたにもかかわらず、李克用に重用されなかつたので不満を抱き、謀反を起こした。そのため李克用によつて極刑が下されたと記されている。無論、李克用や李存信の態度に非がないわけではないがこれを見る限り、李存孝が処刑されたことは本人にも少なからずその責任がある。しかしその後戯曲や小説において、裏切り者の李存孝とは違った側面から彼が取り上げられるようになる。「哭存孝」もその一つである。

「哭存孝」の頭折では、正史や平話と同様、李克用が李存孝との約束を破り、義理の兄弟の李存信や康君立を重

用したため、存孝が潞州留後になれなかつたことが問題となる。これに対し頭折〔尾声〕で鄧夫人は次のように述べる。

〔尾声〕罷、罷、罷、你可便難倚弟兄心、我今日不可公婆意。「劉夫人云」孩兒、你且休要性急、待你阿媽酒醒呵、再做商議。「正旦云」去則便了也。「唱」別近（傍）俺夫妻每甚的、止不過發盡兒掏窩不姓李、則今日暗昧神祇。「帶云」慚愧也。「唱」勢得一個遠相離、各霸着城池、不恁的呵、這李存信康君（立）斷送了了。這一個個瞞心昧己、一個個獻勤買力、存孝、這兩個巧舌頭奸狡賴功賊。

〔尾声〕やめて、やめて、やめて、あなたは兄弟の情をあてにすることができず、私は今日舅姑の意に沿うことができない。「劉夫人がいう」お前、急ぐのはおやめなさい。父さんの酔いがさめてから、相談したらどう。「鄧夫人がいう」もうよいのです。「鄧夫人が歌う」私たち夫婦に関わらないでください、結局李という名字でなかつただけで、今日は天地の神を欺く結果となつたのです。「鄧夫人が添えていう」恥ずかしいわ。「鄧夫人が歌う」もう遠く離れて、それぞれ土地を治めましよう、でなければ、李存信と康君立があなたを殺してしまします。どちらも良心に背き悪事を働く、どちらもご機嫌取りがお上手、存孝、こいつらは口達者でずる賢く手柄を横取るうとする泥棒です。

ここで鄧夫人は姑の制止を振り切り、李存信と康君立から夫の命を守るため、李存孝に潞州留後をあきらめるよう助言する。「五代史平話」と違い、李存孝に何の落ち度も見当たらない。

ところが第二折においても、李存信らは追撃の手を休めない。彼らは李存孝が李克用より与えられた存孝という名を捨て、勝手に本名の安敬思に戻したと讒言したのである。これに怒つた李克用は存孝の捕縛を命じる。このことを受けて、李克用の妻劉夫人が李存孝の改名の真偽を確かめるためにやってくる。これに対し、鄧夫人が夫の無実を訴え、命を守ってくれるように頼む。だが彼女たちの預かり知らないところで、李存孝の処刑が執行され、第二折が幕を下ろす。

第四折では、鄧夫人が夫を亡くして途方に暮れた様子で再登場し、劉夫人に向かって次のように訴える。

〔慶東原〕踏踏的忙那步、吓吓的不住脚、是誰人吶吶的腦背後高聲叫。「劉夫人云」鄧夫人、是我也。「做見哭

科、「云」痛殺我也、存孝孩兒也。「唱」阿者、你把我這存孝來送也。「劉夫人云」我說甚麼來。「唱」你可道不着落、保到頭來須有個歸着。「劉夫人云」媳婦兒也、你不曾忘了一句兒也。「唱」這煩惱我心知、待對着阿誰道。「劉夫人云」孩兒、你且放下骨殖匣兒、你阿媽將二賊子掣將來、與存孝孩兒報讎雪恨也。

〔慶東原〕バタバタとあわただしい足取りで、ハアハアと息を切らせど足を止めず、背後から大きな声でおいと呼ぶのは誰かしら。「劉夫人がいう」鄧夫人、私です。「会つて泣くしぐさをして、言つ」辛すぎます、存孝よ。「鄧夫人が歌う」阿者、あなたが存孝の命を奪つたのです。「劉夫人がいう」私が何と言つたかしら。

「鄧夫人が歌う」あなたは言つたではありませんか、落ちて着かなくても、結局落ちて着つくべきところに落ちて着くと。「劉夫人がいう」嫁よ、あなたはその一言を忘れていなかったのですね。「鄧夫人が歌う」この悩みを私の心は分かっているけれど、誰に打ち明けられるだろう。「劉夫人がいう」お前、しばらく骨壺を下ろしなさい、阿媽が二人の賊を捕まえたら、存孝のために仇を討ち、恨みを雪ぎましよう。

意外なことにこの歌詞では、劉夫人の非難の矛先が夫を助けることができなかつた姑に向けられている。夫を亡くした焦りと不安を抱え、どうすることもできない鄧夫人の行き場のない気持ちがかがえるところに、彼女がそれをぶつけることのできる唯一の相手があつたといふことは驚きに値する。懐の深い姑劉夫人の性格は「哭存孝」と同じ関漢卿作とされる「五侯宴（脈望館鈔本）の劉夫人とも一致し、明代の宮廷における劉夫人の人氣をうかがわせる。

これと同様の状況が『残唐五代』においても起きている。第三十三回「晋王痛哭勇南公」のつぎの場面である。

正在慟哭、忽見一彪人馬飛奔而來、衆視之、乃存孝之妻鄧瑞雲也。瑞雲知此消息、帶領六將到來、放聲大哭、昏絶于地、三五番幾死。衆軍無不哀慟。瑞雲再三上言曰、今存孝死于不幸、大王念父子之情、早爲報仇。

ちょうど大声をあげ嘆き悲しんでいると、突然、一隊の軍が疾走しながらやってきた。みれば、存孝の妻鄧瑞雲であつた。瑞雲はこの知らせを聞き、六將を率いてやってくる、大声をあげて泣き、卒倒し、四、五回死にそうになつた。軍人たちが悲しみ嘆かないものはなかつた。瑞雲は何度も「今存孝は不幸にも亡くなりました。国王さま、父子の情を思い、早く仇を討ってください」といった。

ここにも夫の死を悲しみ、平常心を失つた妻が登場する。しかし、権力闘争に巻き込まれ、諦め悲嘆する「哭存孝」の鄧夫人と比べると、舅である李克用に対し、自分の口で仇を討つてほしいと懇願する鄧瑞雲ははるかに気丈な女性といえる。

こうした妻の悲しみを描くことは正史や『五代史平話』には現れないものであり、「哭存孝」と『残唐五代』に共通するものである。とはいえ夫に助言を行う聡明さと絶望的な状況に対する諦めの良さとを兼ね備えた繊細な鄧夫人像と、六将を随えて克用の前に登場する女傑鄧瑞雲とを同列にみることは難しい。

そもそも『残唐五代』は中国を舞台に巻き起こる壮大な歴史小説であり、李存孝など特定の人物の周りに多くの登場人物を配置することによって、それぞれのエピソードが繋ぎ合わされ展開される。この場合鄧瑞雲は脇役にすぎない。ところが戯曲を見ると、全折を通じて李存孝への憐憫の情が描かれる。ここにおける鄧夫人の役割というのは「鄧夫人苦痛哭存孝」という名が示すように、李存孝の死に対して慟哭することにあつたと考えられる。つまり両者は作品の掲げるテーマが違うのである。このことが女性像の差に表れたのではないだろうか。

またこうした作品のテーマの違いというものは鄧夫人の態度によって示されるばかりではなく、李存孝を祭る文にもよく表れている。その祭文とは、李克用が周徳威に命じて読み挙げさせるもので「哭存孝」では、かなり詳細に書かれている。

祭奠英靈、親藩悔罪。今克用因罍酒聽信狂言、故損壞義男家將。今將賊子盡該誅戮、與公雪冤。衆將縞素、俺哭的那無情草木改色、青山天地無顔、將軍陽世不將金印掛、陰司却掌鬼兵權。衆將番官痛嚙咷、壁上飛搥血未消、塔下枉拴龍駒馬、帳前空掛虎皮袍。英雄存孝今朝喪、多曾出力建功勞、赤心報國安天下、萬古清風把姓標。嗚呼哀哉、伏惟尚饗。

英靈を供養し、克用は罪を悔いる。克用は酒を貪り、狂言を信じたために、義男家將を損なつた。賊たちをことごとく殺し、公のために怨みを雪ごう。將たちは喪服を身につけ、わたしが慟哭すれば、感情を持たない草木も表情を変え、青山天地も面目を失うだろう。將軍はこの世で金印を掛けることがなかつたけれども、あの世で鬼兵を掌管することになった。諸將番官は激しく泣き叫び、壁上の飛搥に血は消えることなく、塔下に

は龍駒馬をむなしく撃ぎ、帳前には虎皮袍をむなしく掛ける。英雄存孝は今亡くなったけれど、尽力し功績をあげた。真心をもつて国家に報い天下を安んじ、永久に高潔な名声を遺す。嗚呼哀しいかな。伏して惟るに尚わくは饗けよ。

略したが祭文の前半には日付、李存孝の出生や特徴、具体的な戦歴が日々挙げられる。とくに注目すべきは克用が自らの行いを悔いている点であり、その深い悲しみと絶望が切々と述べられていることである。また李存孝を「英霊」や「英雄」といつて祭り上げている点も目を引く。このことは「史実には近くても、強さの点からいつても、人物からみても、これを新・旧『五代史』にくらべてもさらに点がからく、そのうえ素性も知れぬとあつてはどうみても英雄の資格すらない」と言われる『五代史平話』の李存孝とは全く異なる評価だといえよう。一方『唐五代』にも存孝を祭る二つの祭文が記され、一つ目で晋王李克用が自ら祭壇を設けて読みあげる。

嗚呼勇南、天下戰士、古今無雙。何天不弔、令死于奸人之手、使我慟傷。嗚呼、吾今年八十、兒既死、吾料隨亡。吾今取二人于市、熬油照燭、照爾幽光、爾冤既白、爾讐亦報、爾名孔揚。嗚呼勇南、魂其有知、曷維尚享。

ああ勇南公、天下の戰士、古今に並ぶものなし。悪人の手にかかつて殺されたことを、どうして天が同情しないことがあるう、私を悲しませる。ああ私は今年八十歳で、息子を亡くし、我も後を追うことになるだろう。私は今（李存信と康君利の）二人を捕えて、明かりをともし、お前の中の徳の輝きを照らし、お前の恨みを明らかにし、お前の仇に報い、お前の名声を広く伝えよう。ああ勇南公、魂はそれを知っているのか。どうして惟るに尚わくは饗けんや。

これは祭文の全文である。李克用の感情を吐露した内容とは言え、「哭存孝」と比べると文章も少なく、内容も抽象的である。では、もう一つ別の祭文を見てみよう。こちらは昭宗が趙文宗に命じて読みあげさせたものである。滅黄巢、扶僖宗、復入長安、誅奸黨、立昭宗、建都天下。官居一品、加爲勇南公之職、勢壓諸邦、是飛虎將軍之譽。唯君正宜享富貴于高堂、豈期命早喪於奸讒。人之死沒、自古難免。不料君父以酒誤害忠良、將二奸盡行誅戮、與汝雪恨。將軍陽世不將金印挂、陰司多握鬼兵權。嗚呼哀哉。尚享。

黄巢を滅ぼし、僖宗を扶け、再び長安に入り、悪党を滅ぼし、昭宗を立て、都を天下に定める。官職は一品に居し、加えて勇南公の職となり、諸邦を制圧したのは、飛虎將軍の手柄である。唯君正に父母より富貴を享けるべきところを、どうして悪人の讒言によつて命を落としたのか。人の死は、古より免れがたし。凶らずもお前の父が酒に酔つて忠臣を害し、二人の悪人に殺させたので、お前のために恨みを晴らそう。將軍はこの世で金印を掛けることがなかったが、あの世で鬼兵を掌管することになった。嗚呼哀しいかな。尚わくは享けよ。こちらは前半に存孝の出世地や経歴が述べられ、所々に「哭存孝」の記述との類似を確認できる。ただ全体的にみると、昭宗の立場から李存孝の死が捉えなおされたことによつて「哭存孝」とは異なり、李存孝を失つたことに對する李克用の深い悲しみと懺悔の描写は削除され、彼の功績を評価することに力を入れた内容となつてゐる。

以前氏岡真士氏は「演義」にせよ「哭存孝」雜劇にせよ、李存孝を美化している点では同じだが、雜劇の方が虚構性は少ない」と分析したが、こと祭文に關して言へば「哭存孝」の方がはるかに饒舌である。「残唐五代」では、英雄逸話のなかで祭文を扱つており、彼が唐に貢獻した点を高く評価する。これに對し「哭存孝」では、感情的な言葉を並べ、深い悲しみの描写に筆を費やす。したがつて、このことから「哭存孝」が存孝の名譽を回復し、彼という英雄の死について悼むことを重視していたことがうかがえるのである。

「哭存孝」のよつに、非業の死を遂げた英雄の物語といふのは、元雜劇では珍しくない。近年、その重要性について田仲一成氏が次のように指摘している。田仲氏によると、これらは元雜劇の最も古い層に屬し、村のために戦死した英雄の孤魂を、慰めるために行われた祭祀儀礼を引き継いで発生したものだといふ。

とはいへ、李存孝の怨恨と救済に当たつて、孤魂本人によつて怨恨が訴えられたわけではなく、その周囲にいた女性たちの力を借りたことで「哭存孝」は古い祭祀儀礼という形から戯曲としての物語性を獲得することに成功している。その際、李存孝になり代わる大役を任された一人が李存孝の妻鄧夫人であつた。それでは、次に正旦が扮するもう一人の人物、葬古歹を取り上げてみたい。

四 莽古歹の登場

先ほど述べたように「哭存孝」では、正旦は二人の人物になりきるが、そのほとんどは鄧夫人であり、第三折のみ莽古歹に扮す。第二折で李存孝が処刑されたことをふまえ、莽古歹は登場するとすぐさま次のように歌う。

〔中呂粉蝶兒〕 頗奈這兩箇奸邪、看承做當職忠烈、想俺那無正事好酒的爹爹。他兩箇似虻蛇、如螻蛄、心腸乖劣。

〔中呂粉蝶兒〕 しゃくなのはあの邪悪な奴らを、職務に忠誠を尽くしたように待遇した、あのまともでない酒好きの父よ。あいつら二人は毒蛇のようでもあり、蠍のようでもあり、心はひねくれている。

名前が伏せられているが、莽古歹の非難の矛先が存孝を陥れた康君立や李存信ではなく、酔っぱらってばかりいる無責任な父李克用にも向けられていることは明らかである。このような内容は続く三つの「醉春風」〔上小楼〕〔上小楼〕でも歌われる。この後、莽古歹は劉夫人に向かつて「阿者聽您孩兒從頭至尾説與阿者、則是休煩惱也。（阿者、あなたの子が初めから終わりまで阿者にお話するのをお聞きください。どうか悲しまないでください）」と言い、次のように歌う。

〔十二月〕 則您那康（君立）眼絶、則你那李存信似螞蟻、可端的憑着他劣缺、端的是今古皆絶。枉了他那眠霜卧雪、阿媽他水性隨邪。

〔十二月〕 あの康君立ときたら凶悪の極み、あの李存信ときたら虫けらのよう、本当に凶悪に任せ、全く前代未聞です。存孝という霜上に眠り雪上に寝る高潔の士を踏みつけたに、阿媽の性質はまっとうではありませぬ。

ここでは、李存孝を「他那眠霜卧雪」と称えるのとは対照的に、李克用を「阿媽他水性隨邪」となじり、康君立や李存信を「則您那康（君立）眼絶、則你那李存信似螞蟻」と扱き下ろす。いくら相手に非があるとはいえ、こうした莽古歹の発言はその身分に相応しいものではない。

しかし、第三折は莽古歹による批判と、それを聞いて嘆き悲しむ劉夫人の言葉とで構成される。李存孝の処刑は前折ですでに執行されており、観客にとって目新しいことが起こるわけではない。その一方で、英靈鎮魂劇という観点から見れば怨恨を訴えるこれらの歌詞こそ、本劇にとって重要な部分とみなすことができる。そうだとすれば大事な場面でなぜ妻鄧夫人ではなく、劉夫人に仕える莽古歹を登場させたのだろうか。正旦が扮する莽古歹とはいったい何者なのだろうか。

莽古歹とは、本来モンゴル人を指す言葉である。本劇ではたびたび劉夫人が「小番」と呼び掛けることから、劉夫人のところを下働きをしていた人物だと考えられる。その莽古歹が存孝鬪頂で、彼を死に追いやった人々になぜ怒りを露わにするのだろうか。また、莽古歹には態度以外にもその身分に似つかわしくない点がある。それは、李克用を「阿媽」もしくは「爹爹」と呼び、劉夫人を「阿者」と呼んでいることである。存孝に対して「存孝」と馴れ馴れしく呼び捨てにしているのも理解しがたい。

もちろん目下の者が目上の者に謙ってこのように呼びかけたとも考えられる。例えば、第二折には、李存孝のところを訪れた劉夫人が卒子に向かって「這裏是李存孝宅中、左右報復去、道有阿者來了也（ここは李存孝の屋敷である。ものども、阿者がやってきてことを伝えよ）」というせりふがある。この言葉に対し卒子は「理會的。報的將軍得知、有阿者來了也（分かりました。將軍にご報告します。阿者がお見えです）」と答える。ここでは卒子が劉夫人を「阿者」と呼んでいるため、「阿者」を劉夫人の通称として捉えることができる。しかし李存孝や李克用に対する時には、存孝を「將軍」と呼び、李克用を「元帥」¹⁸と呼んで敬意を表す。莽古歹のような呼び方はしない。それゆえ、莽古歹が康君立や李存信にどうして暴言を吐くのか。李克用を「俺」という代名詞をつけて「爹爹」や「阿媽」と呼びながら、痛烈に批判するのは、劉夫人のことを「阿者」と呼び、彼女の目の前で存孝を呼び捨てにすることが許されるのか。莽古歹の振る舞いには違和感を覚える。

実はそのように振る舞ってもおかしくない人物がすでに登場している。それは李存孝の妻鄧夫人である。もともと「哭存孝」というのは、李存孝の物語が妻鄧夫人の視点から再構成された物語である。妻の視点が採用されたことについて氏岡真士氏は、李存孝の苦訴を正旦が代弁することで、「彼の反逆性を弱める効果があるのを見逃しては

なるまい。現存の『哭存孝』は、そうした意図の下にすでに改変を受けているとも考えられる」という指摘を行っている。では、葬古歹の視点はいかなる理由で採用されたのだろうか。第三折で起きていることは、正旦が葬古歹に扮し、劉夫人に向かって李存孝の恨みを代弁している。しかも、その内容はいくら女性の口から発せられたものとはいえ、他の折よりも過激である。しかし、李存孝を処刑することになった経緯を伝え、彼の怨恨を晴らし、彼の無念を人々に訴えかけることで、存孝の魂を救済する話がもたらされたとなれば、葬古歹の登場は十分に納得のいくものとなる。李克用らに対する非難を嫁の立場にいる鄧夫人ではなく、彼らと直接関係のない蒙古族出身の人物に語らせることによって、言葉の威力を緩和させたと考えられる。

しかし批判を避ける工夫を盛り込みつつも、やはり観客にとつて鄧夫人と葬古歹は同一人物だとみなされていたのではないだろうか。すでに述べたように、葬古歹は李存孝のことを「存孝」と呼ぶ。例としては、第三折「堯民歌」〔孩要兒〕を挙げることができる。一方、鄧夫人もまた、頭折の「節節高」〔元和令〕〔尾声〕、第二折の「紅芍薬」、第四折の「双調新水令」〔慶東原〕〔梅華酒〕〔沽美酒〕〔太平令〕において、夫を「存孝」と呼んでいる。つまり舞台上では鄧夫人であろうと、葬古歹であろうと正旦は李存孝を「存孝」と呼んでいることになる。鄧夫人が胸のうちに抱えた不満を、葬古歹がなり代わつて述べたことが、人物の呼称に表れたと考えられるのである。

このように「哭存孝」において、五代史故事という既存の題材を、女性の物語にしてみせたことに本作の独自性を見ることが出来る。民間には、早くから李存孝鼻原の内容を持つ物語の予兆があり、これを物語に仕立て上げる段階で、正旦に歌わせることが選択されたと考えられる。

五 名もなき武将から英雄へ

五代史を彩る英雄の一人に李存孝という人物がいる。『新五代史』卷三十六、義兒伝には、武帝李克用の養子で、黄巢軍の鎮圧に力を尽くすが、それに見合った報償を得られず、最後は父克用の命によって車裂きの極刑に処せられたという簡単な記述が残されている。正史に見える彼は特筆すべき存在とはいえない。

ところが通俗文学の分野では、彼はよく知られた人物である。李存孝は怪力の持ち主であり、恨みを残して亡くなった憐れな武将として、明代小説にたびたび登場する。例えば『水滸全伝』には、第四十三回「假李逵剪逦刼單人 黑旋风沂嶺殺四虎」のなかで「不信你一箇人、如何殺得四箇虎。便是李存孝和子路、也只打得一箇」(信じられん、お前一人でどうやって四頭の虎を殺したのか。李存孝や子路ですら、一頭だといつのに)という一文がある。これ以外にも『醒世恒言』第三十三卷「十五貫戲言成巧禍」には「却教劉官人死得不如五代史李存孝、漢書中彭越」(劉官人を死なせてしまつのが五代史の李存孝や『漢書』の彭越に及ばないなんてことがあるうか)とあり、同様の文句は『警世通言』、『三遂平妖伝』、『金瓶梅詞話』などにも確認することができる。²⁾

李存孝は元雜劇の題材としても、おなじみである。今回取り上げた元雜劇「哭存孝」もその一つである。ただし多くの作品が李存孝を主人公とするなか、該劇はその妻や使用人の視点を採用しているという点で異例である。しかも細かな女性心理を描き、それぞれの人物を書き分ける。中心には、李存孝の無念と救済を訴える情が深く聡明で潔い妻鄧夫人を据え、鄧夫人にはない感情的な激しさや無鉄砲さを備えた莽古歹を補助的に登場させる。李存孝の無実を証明し、李克用との橋渡し役を担う劉夫人も重要な存在である。

またこの劇は祭祀儀式の痕跡を留める。劇中では、複数の出来事を積み重ねることによって、かつて李存孝に貼られた裏切り者のレッテルを剥がし、最終的に英霊として祭り上げる構成となっている。いったい、いつ頃から李存孝を擁護する立場から物語が作られるようになったのかは定かではないが、彼は死によって人々の同情を買い、英雄へと変貌を遂げたのである。

注

(1) 孟元老『東京夢華録』(中国商業出版社、一九八二年)巻五「京瓦伎芸」の記述。

(2) 阿部隆一「増訂中国訪書志」(汲古書院、一九八三年)第三篇「中華民国国立中央図書館等蔵宋金元版解題」五三

〇頁を参照。大塚秀高編「増補中国通俗小説書目」(汲古書院、一九八七年)巻三「講史」一七五頁を参照。本稿で

引用する際、底本は『古今小説集成』編輯委員会編の影印本『五代史平話』（上海古籍出版社、一九九〇年）を用いた。

- (3) 孫楷第『中国通俗書目』（作家出版社、一九五七年）巻二「明清講史部」四七 四八頁を参照。注二、大塚秀高編『増補中国通俗小説書目』、二一八頁を参照。底本は『古今小説集成』編輯委員会編の影印本『残唐五代史演義伝』（上海古籍出版社、一九九一年）を用いた。
- (4) 『太和正音府』には「陳孝甫悞入長安」と記載する。この歌詞と、無名氏「雁門関存孝打虎」の第三折越調（古竹馬）一么の内容は一致する。
- (5) 古本戯曲叢刊編輯委員会編『古本戯曲叢刊』四集（商務印書館、一九五八年所収）の『脈望館鈔校本古今雜劇』のテキストを用いた。なお、誤字については（ ）で校訂した。
- (6) 橋本堯「残唐五代史演義論——英雄中心主義——」（『中国文学報』第二十冊、一九六五年所収）を参照。
- (7) 大塚秀高「小説と物語（続）——物語の構造と変貌——」（『中国古典小説研究動態』第五号、一九九一年）を参照。
- (8) 中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として——』（汲古書院、一九九六年）第一部第三章「講史小説の二種類」一九八—一九九頁の記述。
- (9) 趙景深「残唐五代史演義」（『中国小説叢考』齊魯書社、一九八〇年所収）を参照。
- (10) 川島郁夫「白話文学における存孝説話——小説、戯曲に見える人物像について——」（『中国俗文学研究』第四号、一九八六年所収）や、小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一年）第七章「詩話系小説考」、二〇八—二二九頁、（初出は『東方学』第九十五輯、一九九八年）などを参照。
- (11) 注10、小松謙『中国歴史小説研究』二二二—二二三頁を参照。
- (12) 彼の名前は、テキストによって記載が異なる。「哭存孝」では「康軍利」と記載する。一方『残唐五代』では「康君利」と記載する。本稿では、正史にしたがい「康君立」と記載する。
- (13) テキストには「第一折」ではなく「頭折」と記載されているので原文に基づき、そのまま採用した。
- (14) 注6、橋本論文の記述。

- (15) 氏岡真士「『残唐五代史演義』への道」(『中国文学報』第五十二冊、一九九六年所収)の記述。
- (16) 田仲一成『中国演劇史』(東京大学出版会、一九九八年)第四章「元代演劇の形成」を参照。
- (17) 『太平樂府』巻九曾褐夫の散套「遍・羊訴冤」では「忙古歹」とあり、これは「莽古歹」と同じものだと解される。このほか、元・陶宗儀『南村輟耕録』(中華書局、一九五九年)巻一「氏族」の項目の「蒙古七十二種」に「忙古歹」という記載があることから、蒙古族に属することが分かる。
- (18) 『哭存孝』頭折には「報的元帥得知。」(元帥に「ご報告します。）」とある。
- (19) 莽古歹による呼び掛けが不適切であると思われることについて、元雜劇における重複の表現とその方法を考察する魏淑珠「元雜劇中的『重複』的現象与技巧——以『裴度還帶』『玉鏡台』『哭存孝』為例」(『閩漢卿國際學術研討會論文集』、行政院文化建設委員會、一九九四年所収)、五九一頁においても取り上げられ、鄧夫人の口ぶりであると指摘される。
- (20) 注15、氏岡論文の記述。
- (21) 『警世通言』第十三卷「三現身包龍圖斷冤」には「死得不如五代史李存孝、漢書裏彭越」とある。『三遂平妖伝』第十六回「王則領衆貝州造反 永兇率兵據掠郡邑」には「死得不如五代史李存孝、漢書中彭越」とある。『金瓶梅詞話』第九十八回「陳經濟臨臨清開大店 韓愛姐翠館遇情郎」には「死得不好相似那五代的李存孝、漢書中彭越」とある。